

青年期における自尊感情と 自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

福尾 詩織

(久保克彦ゼミ)

問 題

自尊感情は自分自身に対する肯定的、あるいは否定的な考えであり、自己愛傾向は自分が自分を愛することという、どちらも自分自身に対するものである。対人恐怖心性は過度の気遣いや対人緊張など、対人関係の中で問題となりうるものである。青年期は人々が社会に踏み出し、新しい世界で活動を始める時期である。知らない場所や知らない人との関わりが数多く存在し、それらと向き合っていかなければならない。そのような時期に、自分自身への評価を行う自尊感情と、自分への関心を持つ自己愛傾向と、対人場面での緊張などが起きてしまう対人恐怖心性は、青年期の自己像を形成するうえで重要な働きをしていると考えられる。

対人恐怖心性

対人恐怖症は、粗暴な人間を恐れたり、人を嫌ったり、あるいは迫害妄想などのために人を忌避したりするような状態を表すための用語ではない。こうした患者は、人間そのものを恐れるのでも嫌うのでも忌避するのでもなく、仲間と親しく交わりたいという人一倍強い願いを持っている。むしろ、そのような願望が強すぎるために、対人関係のなかで患者自身がつまらぬ何らかの欠陥があらわになり、その結果、親しみに溢れた友好の雰囲気損ねてしまわないか、ということに恐れているのである。笠原(1975)は「他者と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人から軽蔑されるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を引こうとする神経症の一型である」と定義している。

対人恐怖症は、日本人に非常に多く見られ、思春期・青年期に発症しやすい神経症のひとつである。神経症とは心理的原因によって起こる精神障害であり、環境要因と人格要因によって生起する。主な反応としては、不安、ヒステリー、強迫、抑うつなどがあり、対人恐怖の場合は不安と強迫的反応が中心になっている(永井, 1994)。そして、学生を対象にして行われた稲浪・笠原(1994)や木村(1982)の調査では、多くの学生が対人恐怖的な体験を自覚しているとの報告が見られるように、神経症などの病態で発症とまではいかなくとも、健全な一般青年においても人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの対人恐怖の傾向が認められることが非常に多いことが明らかになっている。人間に対して恐怖感を感じるような人間恐怖ではないため、Bräutigam(1986)はこの病態の表現にはAnthropophobie(人間恐怖)ではなく、Soziale Phobien(社会恐怖)、またはSituationphobien(状況恐怖)という用語がより適切であるとしている。

対人恐怖症者の抱えている実際の悩みについて、森田(1960)は、対人恐怖は、そのすべてが対人状況に規定されている特徴を持ち、赤面恐怖(緊張し赤面することを、人に見られことが恥ずかしくて悩む)・視線恐怖(人の目が気になる場合と、自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと悩む場合がある)・表情恐怖(自分の表情がこわばり、ごちこちなくなり、自然に振舞えない)・対人恐怖(人前で緊張することを気にして悩む)・醜貌恐怖(自分の容貌が醜いために周囲の人に嫌な思いを与えているのではないかと悩む)・自己臭恐怖(自分の身体から出る臭いが周りの人を不快にしていると思ひ悩む)などの症状を持つ諸類型の総称としている。岡野

(1998)は、恥の感覚にとられやすく対人恐怖を感じやすい人は、他者承認欲求あるいは他者評価欲求が高く、それに圧倒される形で対人場面での恐怖感が生まれる、と論じている。自分が他者の目にはどう映るのか、どう評価されるのか、そして自分が何か行った際に、それにより嫌われるのではないか、不快に思われないだろうか、と考えてしまうのである。

自己愛傾向

自己愛パーソナリティ障害 (narcissistic personality disorder) とは、精神分析学、心理学、対人関係学などの立場から論じられてきてはいたが、公的な診断概念として採用されたのは DSM-III が初めてである。本障害の特徴は、誇大感・共感性の欠如・他の人の評価に対する過敏性等にあり、DSM-III-R で診断されるには、9項目の基準のうち5項目を満たす必要がある。しかし、自己愛は臨床症状として必ず扱われるものではない。自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって説明される自己愛傾向 (小塩, 1998) として、青年期特有の人格の特徴であるともされている。

自己愛の最も基本的な意味は自分が自分を愛すること (小此木, 1981) である。自己愛と言う概念は、包括的には“自己像を一貫性、安定性、肯定的情緒の彩りがあるものとして維持しようとする機能”として理解される (Stolorow, 1975)。このような自己愛は誰しものが抱く一般的な心理的機能ではないだろうか。しかし、自己像を安定した肯定的価値のあるものとして形成しようとする、そのプロセスに偏りや異常がある場合、それは自己愛の障害と呼ばれることとなる (Kernberg, 1998; Ronningstam, 2005)。

青年期において、自己愛的な特性はよく見られるが、青年期の自己愛的な特性は必ずしも自己愛性人格障害に移行することを意味しない。病理まではいかなくとも、自己愛的な特徴が表面にあらわれやすい時期であるといえる (小塩, 2004)。また、青年期は人が社会に出ていく時期である。住み慣れた拠り所である家族から離れていくのであるが、こうした独り立ちに際しては、自分とい

うものを強く意識し、その存在を周りに認めてもらおうとする気持ちも強まって、自己愛的な状態が生じやすくなるのである (中島, 1998)。Symonds (1951) は自己に対する評価的な態度を自己愛とし、この自己愛には現象的には類似しているものの本質的には全く異なる2種類があると述べている。第1種の自己愛は純粋な自尊意識であり、両親から受容されることによって発達し、自分自身に安心と信頼感をもつというものである。一方、第2種の自己愛は両親から受容されないことによって発達するものであって、他の人々や外的な経験の中にはなく、自分自身の満足の基盤を見いだすことを余儀なくされた状態である。これは感情的な不安定さに根ざしたものであり、不安で非現実的、願望的な自己評価である。そして、こうした自己愛は、他者との建設的な関係を発展させる上で阻害要因になるという。いわば、Symonds (1951) が示した第1種の自己愛は健康的なもの、第2種の自己愛は病的なものと言えるのだろう (小塩, 2004)。

自尊感情

Rosenberg は“自尊感情は一つの特別な対象、すなわち、自己に対する肯定的あるいは否定的な態度である”と定義している (遠藤, 井上, 1992)。自尊感情には自分を「非常によい (very good)」と考える優越性や完成性を意味する見方と、自分を「これでよい (good enough)」と考える自分なりの満足感を意味する見方があると述べている (Rosenberg, 1989)。自尊感情が高い場合は後者の「これでよい」と感じ、自分を尊敬し価値ある人間であると考え、逆に自尊感情が低い場合は自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を示し、自己に対して尊敬を欠いていることを意味する。また違う定義では、自尊感情は“自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚 (遠藤, 1992) とされている。自己イメージにおける肯定的な面として、できるという感覚、有能感、自信、前向き、積極的、信頼感、幸せな気持ちや自分を大切に思う気持などである。一方、否定的な側面には、出来ないという無能感、無力感、劣等感、後ろ向き、消極的、不満感、不幸でつまらない気持ちなどがあげられる (荒木, 2007)。

日々の生活の中で、誰もかれもが常に自尊感情を意識しながら暮らしているわけではない。しかし、社会的地位や年齢、性別に関係なく、気持ちを深く傷付けられることがあれば、そのとき自尊感情を強く意識することとなる。虐待を受けた子どもの自尊感情は低下してしまうことが指摘されており（村瀬，2001），対人関係において自尊感情は重要なものであるが、それだけではなく、人の様々な活動における達成動機を支えるのも、この自尊感情である（佐藤，2009）。

対人関係や達成動機において重要な働きをする自尊感情であるが、高ければよいというものでもないことも指摘されている。自尊感情が低いことは、学業や仕事に対する意欲のなさ、対人関係の構築の難しさ、非行や犯罪、アルコールやドラッグへの依存と関わりがあることが報告されている（Andrew,Neil,John,1989）が、自尊感情の高さとパーソナリティの権威主義的傾向やナルシズムとの間には相関が認められる。自尊感情が高すぎたり低すぎたりすることは、環境からのさまざまな刺激を歪曲して受け止めることにつながるとされている。たとえば、自尊感情の低すぎる人は、何か人に称賛されると自分の低い自尊感情との不意一致にかえって落ち着かなくなる。一方、自尊感情の高すぎる人は、人からの称賛は受け止められるが批判を受け入れることが出来ない。自尊感情の高低だけでなく、その安定性も重要であるとされている。前述した「非常によい（very good）」「これでよい（good enough）」はどちらかだけでなく、2つの側面で自尊感情を捉えている可能性があるため、このバランスが重要なのである（佐藤，2009）。

自己愛傾向と自尊感情の関係

前述したように、自己愛傾向は自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって説明される青年期特有の人格的特徴であるとされている。自己愛傾向にもある自分自身に対する肯定的感覚という点で類似した概念が自尊感情である。DSM-IV（American Psychiatric Association 1994）における自己愛人格障害の記述では、自己愛人格障害をもつ者の

自尊感情が非常にろい（fragile）ことが指摘されている。だが、自己愛と自尊感情には概念上の相違もある。自己愛が人格障害として扱われるような否定的な意味合いをも含むパーソナリティ概念であるのに対し、自尊感情は心理的な適応の指標として用いられるなど両者はやや異なる意味合いを持つ（小塩，2001）。自尊感情は自己の感情的評価に関連し、日常の肯定的・否定的ライフイベントに影響を受けるように（高比良，1998），一時的な自己概念も含む概念である（Westen,1990）。しかし、自己愛は、一時的な自己評価というよりも比較的長期間にわたって見られる安定した人格であり、これまでの理論的変遷の中で、一種の性的倒錯、心理社会的発達的一段階、特異な対象関係、自尊感情を調整する働きなど様々な意味を有してきた概念である（Pulver,1970）。

また Westen（1990）は、自己愛人格の自己像が著しく歪んでおり、安定していないことを指摘している。自己像が不安定であることは自尊感情の基盤が不安定であることも意味するため、Rosenberg（1965）が示唆するように自尊感情レベルの低下に結びつくと考えられる。Kerniset al.（1998）は、不安定な自尊感情に影響を与える要因のひとつとして、貧困な自己概念（impoverishedself-concept）を挙げている。自己像が不安定な者は、自己を評価する際の基準が曖昧であり、日常の様々な出来事を経験する中で自尊感情が変動しやすくなるとも考えられる（小塩，2001）。Wolf,Gedo&Terman（1972）は青年期を、児童期に確立された自我理想が疑われ、新たな理想が構築される時期としている。そして、Adelson&Doehrmann（1980）によると、この時期の変化は自己愛の高まりを導き、自己や人格の統合性が脅かされ、傷つきやすさや、頻繁な自尊感情の変動が顕著であると述べている。

自尊感情と対人恐怖心性の関係

前述したように、恥の感覚にとらわれやすく対人恐怖を経験しやすい人には、他人に認められたい、評価されたいという人一倍の欲求があり、それに圧倒される形で対人場面での恐怖感が生まれるとされている。自尊感情には自分を「非常

によい (very good)」と考える優越性や完成性を意味する見方と、自分を「これでよい (good enough)」と考える自分なりの満足感を意味する見方がある。自尊感情を高くもつことができると、自分を非常によい、これでよいと考え、自分自身を「好ましい人間」と感じ、自分の行動を積極的に「価値があるもの」と考えることができるようになる。従って、自尊感情が高い人は他者に認められたい気持ちや評価されたいという気持ちに圧倒されることで生じる対人恐怖心性は低いのではないかと考えられる。逆に、自尊感情が低いことにより、自分自身に対して否定的な自己評価を持っている人は、特定の対人場面で要求されることに応えられないと感じた時に、対人的な不安や恐怖を引き起こしうるということが考えられるだろう (唐, 2007)。佐藤 (2009) は、「自己主張」する傾向が高い学生は自我の強さを認識し、自分がこれまで成し遂げてきた努力を自分自身で評価しており、逆に不安感や他者への依存心は低いことを明らかにしている。

人間が生きていく中で、対人関係での問題が生じてしまうことはごく普通のことであり、それはさまざまな形で悩みとなるだろう。そのとき、生じた問題を当然のこととして受け止め、割り切り、自分の中で解決したり、周囲との関係の中で解決に至る相談をすることができればそれほど深く思い悩むことは少ないだろう。だが、その問題に対して解決することを考えるのではなく、「自分が悪いのだ」「嫌われてしまったらどうか」と悩んでしまうと、生じた問題だけでなく、自分の関係のある対人関係すべてに不安を感じてしまうのではないかと考えられる。さらに「嫌われたくない」「自分は周囲に不快な思いをさせていないだろうか」と考えるようになってしまうと、それは自分自身に対する肯定感が低くしてしまうこととなり、自尊感情の低下につながると考えられる。これは対人恐怖心性が自分に存在すること自体を劣等感としてしまい、自尊感情を低下させてしまうと考えられるためである (西川, 2005)。

目 的

自己愛傾向と自尊感情、自尊感情と対人恐怖心性は、それぞれに関連があることが様々な研究結

果によって示されており、青年期の自己像を形成する上で重要な働きをそれぞれが持っている。自尊感情は自己愛傾向とは正の相関関係に、対人恐怖心性とは負の相関関係にあることが示唆されている。本研究では、Rosenberg (1965) によって作成された自尊感情の測定尺度の日本語版 (桜井, 1997) である「自尊感情尺度」と、小塩 (1999) によって作成された「自己愛目録短縮版 (NPI-S)」と、堀井・小川 (1997) によって作成された「対人恐怖心性尺度」を用いて、自尊感情と自己愛傾向、自尊感情と対人恐怖心性の関連について、性差での比較も含めて調査する。

仮 説

仮説1 自尊感情と自己愛傾向の相関関係は、男性の方が強い正の相関関係をもつ。

自己愛傾向と自尊感情はこれまでの研究で正の相関関係にあることが示されている (小塩, 1998)。親が子どもを育てる際の教育方針として、男の子であれば両親は自己主張ができるように積極的に行動させようとするが、女の子であれば多少消極的であっても聞き分けのよさを求める (佐藤, 2009) ことは現在においても一般的な考え方であると思われる。「男の子なんだからしっかりしなさい」などの言葉はよく聞くフレーズであるが、それだけに男性はそのような意識を少なからず持っているのではないだろうかと思われる。そのため、自分の意見を明確に持つことや主張する傾向は男性の方が強いのではないだろうかと考えられる。

自己愛目録短縮版 (NPI-S) を構成する3下位尺度には、自尊感情や自信といった非常に強い自己肯定感を意味する項目によって成り立っている「優越感・有能感」と、自分の意見をはっきりと言う、自ら決断する、さらにはやや自己中心的という言葉で表すことができるような内容の項目によって成り立っている「自己主張性」があるために、結果として男性の方が強い正の相関関係が示されるのではないかと考えられる。

仮説2 自尊感情と対人恐怖心性の相関は、女性の方が負の相関が強い傾向をもつ。

仮説1で述べたように、親の教育方針として、男の子よりも女の子の方が聞き分けのよさを求め

られることは現在でも一般的であると思われる。女性が多少消極的であっても聞き分けのよさを求められるということは、自分の意見を強く主張するよりも、他者の意見に従うことを優先することである。多少自分にとって不利益であったとしても、嫌われたくない、不快に思われたくないと考えてしまうのである。このような他者からの評価に敏感で、抑制的になってしまう傾向は女性の方が強いのではないかと考えられる。対人恐怖心性尺度を構成する6つの下位尺度には、「自分や他人が気になる悩み」や「人の目が気になる悩み」や「社会的場面で当惑する悩み」といった他者からの評価や関係についての項目が含まれている。これらは、自分がどのように評価されているのかという不安や悩みについての項目であるために、結果として女性の方が自尊感情と対人恐怖心性の関連は負の相関が強い傾向にあるのではないかと考えられる。

方 法

1. 調査時期 2012年10月31日, 11月1日, 11月20日の3日間で行った。
2. 実施方法 京都学園大学の講義受講者に質問紙を配布し, その講義内に回収した。
3. 調査対象 大学生141名に質問紙調査を行い, 回答に不備のあるものを除いた128名(男性78名, 女性50名, 平均年齢20.02歳)を分析の対象とした。
4. 質問紙の構成
 - ① フェイスシート 回答者について, 年齢・性別の記入欄を設けた。
 - ② 自尊感情尺度 (Rosenberg,1965) の日本語版を桜井 (1997) が作成。質問は10項目で構成されている。回答は「あてはまる」(5点) から「あてはまらない」(1点) の5件法で求めた。ただし, 逆転項目は5点 \leftrightarrow 1点, 4点 \leftrightarrow 2点に換算してから(3点はそのまま) 加算した。教示は以下の通りである。「次の特徴のおのおのについて, あなた自身にどの程度あてはまるかを答え下さい。他からどう見られているかではなく, あなたが, あなた自身をどのように思っているかを, ありのままにお答え下さい」

い」

- ③ 自己愛目録短縮版 (NPI-S; Narcissistic Personality Inventory-Short version) 小塩 (1999) によって作成。3下位尺度(「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」) は各10項目で構成されている。回答は「とてもよくあてはまる」(5点) から「まったくあてはまらない」(1点) の5件法で求めた。教示は以下の通りである。「それぞれの質問が自分にどれだけ当てはまるかを考えて, 1から5の数字のいずれか1つに○をつけてください。質問は1から30まであります。全ての質問に答えて下さい」
- ④ 対人恐怖心性尺度 堀井・小川 (1997) が作成。6下位尺度(「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きていることに疲れている悩み」) は各5項目で構成されている。回答は「全然あてはまらない」(0点) から「非常にあてはまる」(6点) までの7件法で求めた。教示は以下の通りである。「ここに, 様々な悩みや不満が書かれています。ここに書かれていることがらをよく読んで, それが自分に, 「あてはまる」か「あてはまらない」か, その程度を○印で記入して下さい。あまり考えすぎると, わからなくなることがあります。自分に当てはまるかどうか, 読んですぐにどんどん記入していきましょう」

結 果

1. 信頼性分析

自尊感情尺度と自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) と対人恐怖心性尺度の各項目に関して, 信頼性分析を行った。

自尊感情尺度10項目の値を合計して尺度得点を算出した。 a 係数は.770であり, 内的一貫性は十分であると判断した。

自己愛目録短縮版 (NPI-S) は3下位尺度各10項目の値を合計し, それぞれについて信頼性分析を行った。「注目・賞賛欲求」の a 係数は.890であっ

青年期における自尊感情と自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

た。「優越感・有能感」の a 係数は .850 であった。「自己主張性」の a 係数は .833 であった。3 下位尺度それぞれの内的一貫性は十分であると判断した。

対人恐怖心性尺度は 6 下位尺度各 5 項目の値を合計し、それぞれについて信頼性分析を行った。「自分や他人が気になる悩み」の a 係数は .850 であった。「集団に溶け込めない悩み」の a 係数は .920 であった。「社会的場面で当惑する悩み」の a 係数は .924 であった。「目が気になる悩み」の a 係数は .913 であった。「自分を統制できない悩み」の a 係数は .889 であった。「生きていることに疲れている悩み」の a 係数は .891 であった。6 下位尺度それぞれの内的一貫性は十分であると判断した。

2. 相関係数

まず、性別に関係なく得たデータ全体の自尊感情と自己愛傾向、自尊感情と対人恐怖心性の相関関係の分析を行った。

自尊感情尺度と自己愛目録短縮版 (NPI-S) の結果は以下の通りである。3 下位尺度のうち、「優越感・有能感」($r=.599, p<.05$) と「自己主張性」($r=.495, p<.05$) の 2 つの尺度に、有意な中程度の正の相関がみられた。

自尊感情尺度と対人恐怖心性尺度の結果は以下の通りである。6 下位尺度のうち、「自分や他人が気になる悩み」($r=-.368, p<.05$) と「目が気になる悩み」($r=-.314, p<.05$) と「自分を統制できない悩み」($r=-.355, p<.05$) の 3 つの尺度に、有意な弱い負の相関がみられた。「集団に溶け込めない悩み」($r=-.493, p<.05$) と「社会的場面で当惑する悩み」($r=-.433, p<.05$) と「生きていることに疲れている悩み」($r=-.592, p<.05$) の 3 つの尺度に、有意な中程度の負の相関がみられた。

次に、性差をみるために、性別ごとに自尊感情

と自己愛傾向、自尊感情と対人恐怖心性の相関関係の分析を行った。

女性の自尊感情尺度と自己愛目録短縮版 (NPI-S) の結果は以下の通りである。3 下位尺度のうち、「優越感・有能感」($r=.683, p<.05$) と「自己主張性」($r=.465, p<.05$) の 2 つの尺度に、有意な中程度の正の相関がみられた。「注目・賞賛欲求」には相関関係が見られなかった ($r=.117, n.s$)。

女性の自尊感情尺度と対人恐怖心性尺度の結果は以下の通りである。6 下位尺度のうち、「自分や他人が気になる悩み」に有意な弱い負の相関がみられた ($r=-.379, p<.05$)。「集団に溶け込めない悩み」($r=-.536, p<.05$) と「社会的場面で当惑する悩み」($r=-.493, p<.05$) と「目が気になる悩み」($r=-.476, p<.05$) と「自分を統制できない悩み」($r=-.406, p<.05$) の 4 つの尺度に、中程度の負の相関がみられた。「生きていることに疲れている悩み」に有意な強い負の相関がみられた ($r=-.749, p<.05$)。

男性の自尊感情尺度と自己愛目録短縮版 (NPI-S) の結果は以下の通りである。3 下位尺度のうち、「優越感・有能感」($r=.561, p<.05$) と「自己主張性」($r=.526, p<.05$) の 2 つの尺度に、有意な中程度の相関がみられた。「注目・賞賛欲求」には相関関係が見られなかった ($r=.073, n.s$)。

男性の自尊感情尺度と対人恐怖心性尺度の結果は以下の通りである。6 下位尺度のうち、「自分や他人が気になる悩み」($r=-.368, p<.05$) と「自分を統制できない悩み」($r=-.334, p<.05$) の 2 つの尺度に、有意な弱い負の相関がみられた。「集団に溶け込めない悩み」($r=-.471, p<.05$) と「社会的場面で当惑する悩み」($r=-.414, p<.05$) と「生きていることに疲れている悩み」($r=-.494, p<.05$) に有意な中程度の負の相関がみら

表1 自尊感情尺度と自己愛目録短縮版の相関分析結果

	注目・賞賛欲求	優越感・有能感	自己主張性
全体	.084	.599**	.495**
女性	.117	.683**	.465**
男性	.073	.561**	.526**

** $p<.05$

表1 自尊感情尺度と自己愛目録短縮版の相関分析結果

	自分や他人が気になる悩み	集団に溶け込めない悩み	社会的場面で当惑する悩み
全体	-.368**	-.493**	-.433**
女性	-.379**	-.536**	-.493**
男性	-.368**	-.471**	-.414**

	目が気になる悩み	自分を統制できない悩み	生きていることに疲れている悩み
全体	-.314**	-.355**	-.592**
女性	-.476**	-.406**	-.749**
男性	-.205	-.324**	-.494**

** p<.05

れた。「目が気になる悩み」には相関関係が見られなかった ($r = -.205, n.s.$)。

考 察

本研究の目的は、男性の自尊感情と自己愛傾向の関連について調査することと、女性の自尊感情と対人恐怖心性の関連について調査することである。

まず、調査で得たデータより、自尊感情尺度と自己愛目録短縮版 (NPI-S) の相関関係の分析を行ったが、全体的に自尊感情と自己愛傾向は正の相関関係にあり、この結果は小塩 (1998) と類似した結果となった。しかし「注目・賞賛欲求」は全体 ($r = .084, n.s.$)、男性 ($r = .073, n.s.$)、女性 ($r = .117, n.s.$) とすべて無相関であるとの結果が示された。これは、海外では「他者の利用・権利の主張 (exploitiveness/entitlement)」と呼ばれる下位尺度が、日本ではこの尺度と多くの共通する項目を持つ「注目・賞賛欲求」尺度が、自尊感情と無相関であることが報告されている (小塩, 1997, 1998) ことから、これと類似した結果になった。

自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) は「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」の3下位尺度が10項目で構成されている。「注目・賞賛欲求」は「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」「私は、みんなからほめられたいと思っている」などの項目から成り立つ。「優越感・有能感」は「私は、才能に恵まれた人

間であると思う」「私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う」などの項目から成り立つ。「自己主張性」は「私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う」「私は、自己主張が強い方だと思う」などの項目から成り立っている。

自尊感情と自己愛傾向との相関係数を分析したところ、男性のデータでも自尊感情と「優越感・有能感」「自己主張性」との有意な中程度の正の相関関係がみられた。「自己主張性」は男性が $r = .526, p < .05$ で女性が $r = .465, p < .05$ と数値的には僅かに男性の方が高い結果となったが、大きな差があるとは言えなかった。「優越感・有能感」は男性が $r = .561, p < .05$ で女性が $r = .683, p < .05$ と数値的には女性の方が高い結果となった。これにより仮説1は支持されなかった。

仮説1が支持されなかったのは、女性の社会進出が活発になったことや、男女平等が世論で多くみられるようになった影響があらわれているためではないかと考えられる。現在でも男性は「男の子なのだから」と自己主張を行うことがよしとされているが、それと同じように、女性も同じように自分の意見を持つことが重視されるようになったと思われる。そして、女性の社会進出などによる社会的変化に伴い、子どもに対する教育態度も以前に比べて変化したのではないかと考えられる。以前ほど、家や家業を継ぐのが男性でなければならぬという意識が強くない現代社会では、男性も女性も自分の好きなことに挑戦できる時代となったのだろう。そのため、その変化に合

青年期における自尊感情と自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

わせて自己主張の必要性も変化し、「男の子なのだから」といった教育態度が軟化してきているのではないかと考えられる。

次に調査で得たデータにより、自尊感情尺度と対人恐怖心性尺度の相関関係の分析を行ったが、全体的に自尊感情と対人恐怖心性は負の相関関係にあり、この結果は唐（2007）と類似した結果となった。

対人恐怖心性尺度は「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きていることに疲れている悩み」の6下位尺度が5項目で構成されている。「自分や他人が気になる悩み」は「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えている」などの項目から成り立っている。「集団に溶け込めない悩み」は「集団の中に溶け込めない」「グループでのつき合いが苦手である」などの項目から成り立つ。「社会的場面で当惑する悩み」は「会議などの発言が困難である」「人前に出るとオドオドしてしまう」などの項目から成り立つ。「目が気になる悩み」は「人と目を合わせていられない」「人の目を見るのがとてもつらい」などの項目から成り立っている。「自分を統制できない悩み」は「根気がなく、何ごとにも長続きしない」「ひとつのことに集中できない」などの項目から成り立つ。「生きていることに疲れている悩み」は「生きていることに価値を見いだせない」「充実して生きている感じがしない」などの項目から成り立っている。

性別で分けずに全体のデータで相関分析を行ったところ、6下位尺度すべてにおいて自尊感情との有意な負の相関関係が示され、「自分や他人が気になる悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」は弱い負の相関関係、「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「生きていることに疲れている悩み」は中程度の負の相関関係が見られた。しかしながら、男女別に相関分析を行ったところ、女性の方が全体や男性の結果よりも数値的に高い結果となった。女性の結果は、全体の結果よりも弱い負の相関関係が見られた「自分や他人が気になる悩み」と「目が気

なる悩み」と「自分を統制できない悩み」の3下位尺度が中程度の負の相関関係の結果となった。全体の結果では中程度の負の相関関係が見られた「生きていることに疲れた悩み」は、強い負の相関関係が見られた。そして、男性の結果は女性の結果とは逆に、全体や女性の結果よりも数値的に低い結果となった。全体の結果で弱い負の相関が見られた「自分や他人が気になる悩み」と「自分が統制できない悩み」は同様に弱い負の相関関係が見られたが、「目が気になる悩み」では無相関であるとの結果が出た。この結果により、仮説2は支持されたと考えられる。

女性の方が「自分や他人が気になる悩み」や「目が気になる悩み」のような、周囲からの評価が気になる下位尺度の方が高いのは、男性よりも女性の方が集団行動を好みやすく、外見への興味関心が高いからではないだろうかと考えられる。また、女性は日常的に化粧をするなど、周囲から見られているという感覚が強いためではないかと思われる。特に化粧に慣れた女性は「素颜では外に出ることができない」といったことがあるように、周囲が思う以上に、そして本人が思う以上に自分がどう見られているかを気にかけ、その意識は自分に対する肯定的感覚である自尊感情と関連しているのではないかと考えられる。結果の中で最も高い数値となった女性の「生きていることに疲れている悩み」は、自尊感情と強い負の相関関係が示された。聞き分けの良さが求められることや、集団行動の中にいることの多い女性は、その分対人関係などでのストレスや悩みなどから、「生きていることに疲れている」と感じる人が多いのではないだろうかと思われる。そのような悩みを持っていることで、自分を肯定的に捉えることができずに、男性よりも対人恐怖心性の方が強く、自尊感情が低くなったのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究では、自尊感情と自己愛傾向、自尊感情と対人恐怖心性の男女差についてどのような相関関係があるかについての検討を行った。自尊感情と自己愛傾向の正の相関関係は男性の方が強い傾向にあるとした仮説1は支持されなかったが、自

尊感情と対人恐怖心性の負の相関関係は女性の方が強い傾向にあるとした仮説2は支持された。自尊感情尺度と対人恐怖心性尺度を用いて本調査を行ったが、ふれ合い恐怖尺度や友人関係尺度などの質問紙などを加えて行うことで、より深い結果が得られたのではないかと考えられる。社会の中で生きる以上、周囲の人々との関わり方を考えることや、自分に対して肯定的感覚を持つということは非常に重要なことであるだろう。また、対人恐怖心性の傾向が強いと、自尊感情も低くなってしまい、他者を受容することが難しくなるのではないだろうかと思われる。自分が他者を受容するよりも、自分が他者からどう見られているのか、受容されているのだろうかということばかりが気になり、自分が他者を受容するだけのキャパシティは低くなると考えられる。対人関係において、自分自身が他者に受容され肯定的に評価されることは重要であるが、同様に、自分自身もまた、他者を受容し肯定的に評価することも重要であると考えられる。人間が生きていく中で、自分自身に対しても、他者に対しても、拒否したり否定的に評価するばかりでは対人関係自体が成り立たなくなってしまう。そうになってしまうと自尊感情や対人恐怖心性だけでなく、新たな問題も生じてしまうだろう。自分自身の評価についても、対人関係についても、これから様々な角度からの研究が行われることで、精神的な問題の解決への道が発見されていくのではないだろうか考える。

引用文献

- Andrew M. Mecca, Neil j. Smelser, John Vasconcellos (Eds.) (1989) *The Social Importance of Self-Esteem*, University of California Press.
- 荒木紀幸 (2007) 教育心理学の最先端 自尊感情の育成と学校生活の充実 あいり出版
- Bräutigam, W.: Phobie. In: *Lexikon der Psychiatrie, 2. Auflage, Gesammelte abhandlungen der gebräuchlichsten psychiatrischen Begriffe (herg.Ch.Müller)*, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, London, Tokyo, P.520, 1986.
- 稲浪正充・笠原嘉 (1968) 大学生と対人恐怖症 全国大学保健管理協会誌, 4, 24—28.
- 井上祥治・遠藤辰雄他編(1992)セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- 海塚敏郎・清水健司 (2002) 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 2002, 50, 54 - 64.
- 笠原嘉 (1975) 対人恐怖 精神医学事典 弘文堂
- Kernberg,O.F. (1998) Pathological narcissism and narcissistic personality disorder:Theoretical background and diagnostic classification. In E.F.Ronningstam (Ed.), *Disorder of narcissism Diagnostic, clinical, and empirical implication*. Washington,DC:American Psychiatric Association.pp.29—51.
- Kernis, M.H., Whisenhunt, C.R.,Waschull, S.B., Greenier, K.D., Berry, A.J., Herlocker, C.E.,&Anderson,C.A.1998) Multiple faces of self-es-teem and their relations to depressive sy-Mptoms.*Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 657-668.
- 木村駿 (1982) 日本人の対人恐怖 勁草書房
- 小此木啓吾 (1981) 自己愛人間 朝日出版
- 小塩真司 (1998) 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280 - 290.
- 小塩真司 (2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究 (2001) 第10巻 第1号 35 - 44
- 小塩真司 (2004) 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司・川崎直樹(2011)自己愛の心理学 概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 森田正馬 (1960) 神経質の本質と療法 白楊社
- 村瀬嘉代子 (2001) 児童虐待への臨床心理学的援助—個別的にして多面的アプローチ 金剛出版
- 永井徹 (1994) 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析— サイエンス出版
- 中島啓之 (1998) 青年期の逸脱行動と自己愛 現代青年の理解の仕方—発達臨床心理学的視点から— ナカニシヤ出版
- 西川勝利 (2005) 青年期における対人恐怖心性と

自尊感情の関連について 愛知学院大学文学
部紀要 35, 215, 2005

岡野憲一郎 (1998) 恥と自己愛の精神分析－対人
恐怖から差別論まで－ 岩崎学術出版社

Pulver,S.E. (1970) Narcissim: The term and the
concept. *Journal of the American Psychiatric
Association*. 18, 319 - 341.

Ronningstam,E.F. (2005) *Identifying and
understanding the narcissistic personality*.
New York Oxford University press.

Rosenberg,M. (1965) *Society and the adolescent
self-image*. Princeton: Princeton University
Press.

佐藤淑子 (2009) 日本の子どもと自尊心 自己主
張をどう育むか 中公新書

Stolorow, R.D. (1975) Toward a functional definition
of narcissism. *International Journal of
Psycho-Analysis*,56, 179 - 185.

Symonds,P.M. (1951) *The Ego and the Self*.New
York:Appleton.

高比良美詠子 (1998) 対人・達成領域別ライフ
イベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の
検討 社会心理学研究, 14, 12-24.

唐皓 (2007) 対人不安と自尊感情・対人信頼
感の関連について 臨床教育心理学研究
2007. 3 vol. 33 No. 1.

Westen,D. (1990) The relations among narcissism,
egocentrism, self-concept,and self-esteem:
Wxperimental, clinical, and theoretical
considerations. *Psychoanalysis and Con-
temporary Thought: A Quarterly of Integrative
and Interdisciplinary Studies*, 13,183 - 239.

Wolf,E.,Gedo,J.,&Terman,D. (1972) On the
adolescent process as a transformation of
The self. *Journal of Youth and Adolescence*,
1, 257-272.

大学生の自己に対する意識調査

この調査は、大学生が持つ自分自身に対する意識を調べようとするものです。

6枚の質問紙で構成されていますので、それぞれについて、ありのままにお答えください。

その際、回答漏れのないようお願い申し上げます。

なお、すべての回答は統計的に処理され、あなた一人の回答のみを問題としたり、公表することはありません。回答いただいた質問紙は、調査者が責任を持って保管し、調査が終わり次第、適切に処分いたします。

もしも、回答の最中に精神的な苦痛などを感じられた場合は、回答をやめていただいて構いません。

この質問紙により、個人が特定されることはありませんので、ご協力いただければ幸いです。

年齢 () 歳

性別 ()

青年期における自尊心と自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

次の特徴のおおのについて、あなた自身がどの程度あてはまるかをお答えください。

他からどう見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままにお答えください。1から5の数字のいずれか1つに○をつけてください。

質問は全部で1から10まであります。全ての質問にお答えください。

【選択肢】

5. あてはまる
4. ややあてはまる
3. どちらともいえない
2. ややあてはまらない
1. あてはまらない

1	少なくとも人並みには、価値のある人間である。	5	4	3	2	1
2	いろいろな良い素質を持っている。	5	4	3	2	1
3	敗北者だと思ふことがよくある。	5	4	3	2	1
4	物事を人並みには、うまくやれる。	5	4	3	2	1
5	自分には、自慢できるところがあまりない。	5	4	3	2	1
6	自分に対して肯定的である。	5	4	3	2	1
7	だいたいにおいて、自分に満足している。	5	4	3	2	1
8	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	5	4	3	2	1
9	自分は全くだめな人間だと思ふことがある。	5	4	3	2	1
10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。	5	4	3	2	1

それぞれの質問が「自分にどれだけあてはまるか」考えて、1から5の数字のいずれか1つに○をつけてください。質問は1から30まであります。全ての質問にお答えください。

【選択肢】

5. とてもよく当てはまる
4. どちらかという当てはまる
3. どちらともいえない
2. どちらかという当てはまらない
1. まったく当てはまらない

1	私は、才能に恵まれた人間であると思う。	5	4	3	2	1
2	私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある。	5	4	3	2	1
3	私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う。	5	4	3	2	1
4	私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う。	5	4	3	2	1
5	私は、みんなからほめられたいと思っている。	5	4	3	2	1
6	私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う。	5	4	3	2	1
7	私は、周りの人達より有能な人間だと思う。	5	4	3	2	1
8	私は、どちらかといえば注目される人間になりたい。	5	4	3	2	1
9	私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように 振る舞っている。	5	4	3	2	1
10	私は、周りの人が学ぶだけの価値のある長所を持っている。	5	4	3	2	1
11	周りの人たちが私のことをよく思ってくれないと、 落ち着かない気分になる。	5	4	3	2	1
12	私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ。	5	4	3	2	1
13	周りの人々は、私の才能を認めてくれる。	5	4	3	2	1

青年期における自尊感情と自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

14	私は、多くの人から尊敬される人間になりたい。	5	4	3	2	1
15	私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う。	5	4	3	2	1
16	私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている。	5	4	3	2	1
17	私は、人々を従わせられるようなえらい人間になりたい。	5	4	3	2	1
18	これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う。	5	4	3	2	1
19	私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる。	5	4	3	2	1
20	機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい。	5	4	3	2	1
21	いつも私は話している内に、話の中心になってしまう。	5	4	3	2	1
22	私に接する人はみんな、私と言う人間を気に入ってくれるようだ。	5	4	3	2	1
23	私は、みんなの人気者になりたいと思っている。	5	4	3	2	1
24	私は、自己主張が強い方だと思う。	5	4	3	2	1
25	私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う。	5	4	3	2	1
26	私は、人々の話題になるような人間になりたい。	5	4	3	2	1
27	私は、自分独自のやり方を通すほうだ。	5	4	3	2	1
28	周りの人達が自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う。	5	4	3	2	1
29	人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる。	5	4	3	2	1

30 私は、個性の強い人間だと思う。 5 4 3 2 1

ここに、様々な悩みや不満が書かれています。ここに書かれていることがらをよく読んで、それが自分に、「あてはまる」か、「あてはまらない」かその程度を○で記入してください。あまり考えすぎると、わからなくなることがあります。自分に当てはまるかどうか、読んですぐ、記入してってください。

質問は1から30まであります。すべてにお答えください。

【選択肢】

0. 全然あてはまらない
1. あてはまらない
2. ややあてはまらない
3. どちらともいえない
4. ややあてはまる
5. あてはまる
6. 非常にあてはまる

1 他人が自分をどのように思っているのかとても
気になる。 0 1 2 3 4 5 6

2 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ
考えてしまう。 0 1 2 3 4 5 6

3 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように
思ってしまう。 0 1 2 3 4 5 6

4 自分のことが他の人に知られているのではないかと
よく気にする。 0 1 2 3 4 5 6

5 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。 0 1 2 3 4 5 6

6 集団の中に溶け込めない。 0 1 2 3 4 5 6

7 グループでの付き合いが苦手である。 0 1 2 3 4 5 6

青年期における自尊感情と自己愛傾向・対人恐怖心性の関連について

8 仲間の中に溶け込めない。 0 1 2 3 4 5 6

9 人が大ぜいいると、うまく会話の中に
入っていけない。 0 1 2 3 4 5 6

10 人との交際が苦手である。 0 1 2 3 4 5 6

11 会議などの発言が苦手である。 0 1 2 3 4 5 6

12 人前に出るとオドオドしてしまう。 0 1 2 3 4 5 6

13 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて
話せない。 0 1 2 3 4 5 6

14 大ぜいの人の中かで向かい合って話すのが
苦手である。 0 1 2 3 4 5 6

15 引っ込みじあんである。 0 1 2 3 4 5 6

16 人と目を合わせてられない。 0 1 2 3 4 5 6

17 人の目を見るのがとてもつらい。 0 1 2 3 4 5 6

18 人と話をするとき、目をどこにもって行って
いいかわからない。 0 1 2 3 4 5 6

19 顔をジーンと見られるのがつらい。 0 1 2 3 4 5 6

20 向かい合って仕事をしているとき、相手に
顔を見られるのがつらい。 0 1 2 3 4 5 6

21 根気がなく、何事も長続きしない。 0 1 2 3 4 5 6

22 ひとつのことに集中できない。 0 1 2 3 4 5 6

23 意志が弱い。 0 1 2 3 4 5 6

24 計画を立てても実行が伴わない。 0 1 2 3 4 5 6

25 すぐに気持ちがくじける。 0 1 2 3 4 5 6

26 生きていることに価値を見いだせない。 0 1 2 3 4 5 6

27 充実して生きている感じがしない。 0 1 2 3 4 5 6

28 いつも疲れているような感じがする。 0 1 2 3 4 5 6

29 いつも頭が重い。 0 1 2 3 4 5 6

30 何をやってもうまくいかない。 0 1 2 3 4 5 6

質問は以上です。ご協力いただきまして、本当にありがとうございました。